

『内部監査入門』



日本金融監査協会 編
 / 金融財政事情研究会 刊
 1,680円 (税込)

経営者が 「問題に気がつく」ためのプロセス

「うちは問題ありません、という銀行には気をつける。問題に気がつかない危険な銀行だ」。1998年の金融監督庁(当時)発足からの2年間、検査部長として検査官たちとよく語り合った一節だ。

97年秋に始まったわが国の金融危機のさなか、主要19行に対する集中検査・考査では不良債権の把握が焦点となった。しかし、当局の思いはその先にあった。真に問題なのは不良債権の存在という「結果」ではなく、それが発生し、増加し、そして放置されたというプロセス、つまり「原因」のほうなのだ、と。これが金融検査マニュアル策定につながっていく。

本書を通読して、当時を懐かしく思い出した。金融機関の健全性を損なうようなリスクが、適切に管理されないまま放置されてはならない。そして、この課題は第一義的に金融機関自身の責務であり、内部監査は、経営者とその責務を果たす、すなわち、「問題に気がつく」ためになくてはならないものである。

本書はこうした視点から著わされた内部監査人の入門書であり、日本金融監査協会主催研修セミナーの4人の講師が執筆している。「はじめに」においては、

「はじめに」においては、以外の金融危機や金融不祥事を契機として、金融機関の内部監査を巡る制度、考え方、取り組みなどが発展してきたことが簡潔に整理されており、読者を内部監査の意義と重要性の理解へと導く。

第1章では、内部監査の国

際基準や金融検査マニュアルをふまえ、内部監査の基礎知識が提供される。内部監査は何の役に立つのか、という視点で整理されており、読者の「やる気」をそその内容となっている。

第2章はリスクベース監査の実務を解説している。リスクの特定から監査結果のフォローアップまでの流れを、経営目標の達成を支援するという監査の目的に沿って記述しており、経営陣との認識の共有というガバナンスの基本が強調される。

第3章は、リスク管理態勢の監査について、リスクの多様化、複雑化への対応と、経営判断への活用を念頭に、監査のポイントを整理している。第4章はコンプライアンス態勢の監査ポイントを解説している。コンプライアンスを信頼の確立のための取組みと

位置付け、「知識」よりも「意識」が職員に根づいているかが本質であるとの視点から、わかりやすく記述されている。

第5章では、金融検査マニュアルをふまえて、システム監査のポイントを整理しており、最近注目される情報セキュリティや外部委託先の管理も簡潔に述べられている。

実務家であり、セミナーの講師でもあるという4人が初心者向けに記述しているだけに、リスクベースのプロセスチェックとして具体的に何をすればよいのか、実例とともに平易に解説されている。有用性の高い入門書といえる。ベテランや経営陣には、本書の内容は「当り前のこと」と思えるかもしれない。しかし、当り前のことを当り前に実行することは存外むずかしい。内部統制に思わぬ手抜きを勧めたい本である。(評者 元金融庁長官 五味廣文)